

大作曲家は どうやって 名曲をつくったか

草稿研究が教えてくれるもの

講師

岡田 暁生

音楽学/京都大学人文科学研究所教授

浅井 佑太

音楽学/お茶の水女子大学講師

11月1日(火) 18:30 - 20:00

本セミナーはZoomウェビナーを利用したオンライン視聴にて実施します



視聴を希望される方は

以下のリンクから事前登録をお願いいたします。

https://zoom.us/webinar/register/WN_T-bXtMgfQ5yaHwNtq2118w

ご登録いただいたメールアドレスに追って視聴用URLが送付されますので、シンポジウム当日はそちらのURLにアクセスをお願いいたします。

主催 京都大学人文科学研究所

お問い合わせ z-academy@zinbun.kyoto-u.ac.jp

<https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>



大作曲家たちはひらめきだけで名曲をつくったわけではありません。アイデアをメモし、推敲し、修正し、またやり直しながらかつくりあげていったのです。草稿をとおしてわたしたちは大作曲家たちの創作の舞台裏をかいま見ることが出来ます。モーツァルト、ベートーヴェン、リヒャルト・シュトラウス、ウェーベルン—彼らの手書きのメモから何が読みとれるのでしょうか？

講師略歴



岡田 暁生

1960年、京都府生まれ。音楽学者、京都大学人文科学研究所教授。大阪大学大学院博士課程単位取得満期退学、1991年までミュンヘン大学およびフライブルク大学に留学。2001年に『オペラの運命』でサントリー学芸賞受賞、2009年に『ピアニストになりたい!』で芸術選奨新人賞、『音楽の聴き方』で吉田秀和賞受賞。十九世紀のオペラおよびピアノ音楽の研究から出発し、近年ではジャズ史とも取り組んでいる。近刊に『モーツァルト』（ちくまプリマー新書）およびコロナ時代の音楽を論じた『音楽の危機』（中公新書：小林秀雄賞受賞）が話題を呼んだ。2021年度京都府文化賞を受賞。

1988年大阪生まれ。京都大学文学研究科で美学美術史学（修士）を、ケルン大学音楽研究所で音楽学（Dr.phil.）を学ぶ。専門は19・20世紀のドイツ語圏の音楽、音楽文献学、新ウィーン楽派、とりわけシェーンベルクとウェーベルン。主な著作に『Anton Webern: Komponieren als Problemstellung. Quellenstudien zu seinem Schaffen 1914–1926 (=Beihefte zum Archiv für Musikwissenschaft 85)』、『シェーンベルク《弦楽四重奏第三番》作品30の分析：その音響的側面を中心に』（『音楽学』第60巻1号）などがある。『レコード』

access

